

私の歴史地理研究と歴史地理学会

木 下 良



1. 歴史地理学への道

歴史地理学会が当初日本歴史地理学研究会として発足したのが1958年4月29日ということであるから、当時私は同志社女子中・高等学校の教師になってから6年目で、ようやくいろんな役職が割り当てられるようになり、高校生徒会顧問兼生徒部副主任に任じられて校務に忙しく学会の情勢には疎かったので、研究会の発足のことも知らなかった。

また、卒業当時は人口と都市に関心があり、籍だけ置いていた旧制大学院の研究テーマも「人口の移動と都市の発達」であったから、都市学会には創設当初から入会したが歴史地理にはあまり関心もなかったのである。歴史地理に興味を抱かれるようになったのは、生徒部副主任の激務から離れて地歴部の顧問になり、生徒と一緒に史跡の多い京都周辺を歩き廻るようになってからのことである。

また、1960年代に入って同志社大学人文科学研究所の嘱託研究員になり、日本史を中心とする研究活動に参加するようになると、当然のことながら歴史地理的な分野を担当することになった。当時、そのフィールドは丹波国で、亀岡市馬路町^{うまじ}や現在は京都市右京区に入っている山国盆地などの共同研究が行なわれていた。山国盆地の共同研究の成果をまとめた『林業村落の史的研究』（1966年、ミネルヴァ書房）では「山国盆地の集落景観とその歴史地理的考察」として、条里などについても述べている。

当時、米倉二郎先生や藤岡謙二郎先生が国府について研究を発表されており、1960年に刊行された米倉先生の『東亜の集落』や藤岡先生の『都市と交通路の歴史地理学的研究』などにその成果が盛られていて、大いに興味をそそられた。そこで、1963年秋に名古屋大学で開催された日本地理学会・人文地理学会合同大会の大井川巡検に参加した後、足利健亮君と一緒に静岡に泊まり、翌日は郡家の研究をしていた足利君は藤枝の「郡」^{こおり}に行くと言って別れ、立命館大学の研究会で藤岡先生が発表されたこと（後に「古代東海三国の地域中心と国府の調査—参河・遠江・駿河の場合—」『立命館文学』223, 1964年）を思い浮かべながら、静岡市内の駿河国府想定地、薄暗くなった頃に磐田市の遠江国府想定地、浜松でもう一泊して豊川市の参河国府想定地などを廻ったのが、私の国府研究の第一歩である。

その当時、丹波国府の所在地については諸説があったが、最も有力な説は「国府」^{こくぶ}の地名があり、総社に当たると見られる宗神社などもある南丹市八木町北屋賀であったが、大堰川左岸で共同研究の対象地であった馬路からも近い。たまたま共同研究仲間の仲村研君が、「丹波国吉富庄古絵図」を同人誌『史朋』2号（1963年）に紹介発表した。それには庄域外に当たっているが、まさしく屋賀の地に「国八疋」「在疋等住所」など丹波国府関係と見られる建物が描かれている。

そこで現地を訪れてみたが、周囲を山に囲まれた狭い空間で、当時「方八町」などと考えられていた国府域は到底取れそうにない。また、山陰道駅路は大堰川右岸を通っているので、律令期の国府の場所としては適当でな

いように思われた。また当地は船井郡に入り『和名類聚抄』に「国府在_二桑田郡_一」とあるのには合わない。

吉富庄は藤原成親(1138~1177)が後白河院法華堂領に寄進したもので、絵図は室町時代の写図と見られるが、その裏書には「一院御願法華堂領吉富庄絵図 承安元年(1174) 閏十月廿日持勝示」と記されており、ほぼその当時の状況を示すものと考えられる。

そこで、ここは『和名類聚抄』以後の平安時代末期の国府で、律令期の国府は別地に在ったのではないかと考えて、桑田郡の中枢部をなす亀岡市の小字図を検討してみた。その結果、亀岡市千代川に「^{くにしまき}国司牧」「^{だいもん}大門」「^{がくどう}学堂」「^{くにしがもり}国守ヶ森」「^{くわでら}桑寺」など一連の小字地名を見付け、現地調査してみると凡そ「方六町」の国府域も考えられるので、『史朋』4号(1964)に「丹波国府新考」として発表したのが、歴史地理関係の最初の論文である。藤岡先生を現地に御案内した結果、国府と考えるとよいだろうとお認め頂いたが、その際に字「桑寺」で布目瓦を拾った。桑寺は郡名を冠した桑田寺で、国府付属寺院の可能性がある。

以来、10年間程は国府の研究調査に専念し、全国66国3嶋(多嶋嶋を含む)の国府想定地を全て廻って幾つかの論文を発表したが、関連して古代律令国家の地方組織なども考えるようになり、「律令時代における辺境村落の一類型—陸奥国の「方八丁」について—」(『人文地理』23-1, 1971年)を発表している。1972年に藤岡先生を中心に行なわれた古代交通路の調査で肥前・肥後両国を分担したが、肥前国佐賀平野を16kmにわたって一直線に通る古代道路の痕跡を認めたことから、以来古代道路に関心が移って国府研究のまとめもしないまま現在に至っている。ということで、歴史地理的な研究を行なってきたものの、私のやっていることが歴史地理学になるのかどうか、未だに心許ない気持ち

でいる。

2. 歴史地理学会入会

歴史地理学会に入会したのは1970年のことらしく、立教高等学校で行われた大会「海洋の歴史地理」に参加した記憶があり、紀要13『海洋・海岸の歴史地理』(1971)末尾の「会務報告」に新入会員として山澄元・井戸庄三・千田稔などの諸君と一緒に名前が挙げられている。

1973年に神奈川大学に勤めることになって、関東に引っ越して来てからは会との関係が深くなる。その年の大会は東京学芸大学で開催されたが、共同課題が「交通の歴史地理」だったので、金坂清則・水田義一・足利健亮・山田安彦の諸君が前年の「古代交通路の調査」の成果を報告している。この時の討論も私のその後の研究には大きく寄与することになった。

その秋には新井鎮久・斉藤貞夫・長岡顕の諸氏と共に選挙管理委員を委嘱され、その主査をさせられたのが始まりで、結局自身が1974-75年度の評議員に選ばれ、また常任委員として集会を担当することになった。会長は藤岡謙二郎先生で常任委員長は中田榮一さんである。当初の日本歴史地理学会当時は会長を置かず常任委員長が会を代表していたが、1966年度から名称を歴史地理学会に改め会長を置いたが、以来会長が常任委員長を兼任してきたらしく、1972-73年度の会長兼常任委員長は浅香幸雄先生であった。会長が関東地区以外から選出されたので、別に常任委員長を選任することになったらいい。ところで、集会委員としては自ら第70回例会(1974年1月)で「肥前・肥後における『延喜式』駅家と駅路の復原」を発表し、第71回例会と第72回例会では発表に対する「所見」を述べている。

1976-77年度は会長が米倉二郎先生、常任委員長は変わらず、私は編集・会報担当を務めた。当初は大会に発表された論文をまとめ

た年一冊の紀要の他に、会員への連絡手段として『会員通信』が発行されていたが、1974年度の74号から『歴史地理学会会報』と改め、総会・大会・例会などの通知と報告、紀要編集題目、シンポジウム課題の通知、新入会員、寄贈文献、書評などを掲載する他、「論説」も載せている。1974-75年度は紀要・会報共に同じ編集委員で担当したが、両方の編集ではかなり負担がかかるので、1976-77年度から紀要と会報の編集を分けたのである。なお、会報は1980年度から季刊の『歴史地理学』に改められ、現在に繋がる学会誌としての体裁を整えたが、通算号数は会員通信・会報から引き続いて109号から『歴史地理学』になっている。

この間、私は1975年度の第18回大会（共同課題「災害の歴史地理」）で「災害による国府の移転」、76年度の第19回大会（共同課題「都市の歴史地理」）では「国府の『十字街』について」を発表し、会報84号（1976年）に「国府一覧表の作成について」を書いている。

3. 富山大学時代

1978-79年度からは山崎謹哉さんが常任委員長になり、事務局も専修大学に変わったが、私は1978年度から富山大学に移ったので、暫く委員から外れることになった。しかし、1977-78年度は編集（紀要）担当ということで常任委員に選ばれている。紀要の編集には特に関東地区在住者以外でも可能ということだったのだろう。実際に特に出京した覚えはないから郵便連絡ですんだらしい。

ところで、富山は古くから地理学研究の盛んな土地で、富山地学会は1931年の創立で地方の地学・地理学会としては極めて古い歴史を有しているし、また地理学関係の研究所として砺波散村地域研究所、黒部川扇状地地域社会研究所、五箇山の平村山村研究所などがあり、地理学研究者も多く出ており、私が知っている限りでも竹内常行・浅香幸雄・籠

瀬良明・中田榮一の諸先生や宮口侗廸・山口守人・金田章裕さんなどが居られる。浅香幸雄先生は東京教育大学から専修大学にお勤めになった後、郷里に帰って来られて北陸工業高等専門学校校長、富山県教育委員長、砺波散村地域研究所長などもなさったので、私は富山でも大変お世話になった。

4. 國學院大學時代

1983年度から國學院大學に勤めることになってまた関東に出たが、早速1984-85年度役員では常任委員を委嘱され、集会担当となった。会長は山崎謹哉、常任委員長は山田安彦の両氏であった。84年にフランスで国際地理学会議が開催され、パリの本会議に先立って歴史地理学ワーキンググループ「空間組織の歴史的变化」の集会がナンシーで開かれた。私もこれらに参加したので、第123回例会（1984年10月）で「第52回国際地理学会議に参加して-シンポジウム「空間組織の歴史的变化」「地理思想史」を中心に-」と題して、私が前者について、竹内啓一さんが後者を報告した。

85年の大会（共同課題：情報・交通の歴史地理）では課題の趣旨説明という意味で「歴史地理的にみた交通・通信・情報の諸問題-解題にかえて-」と題して報告をしたので、紀要28号に掲載されている。また『歴史地理学』124号に「日本古代駅路とローマ道との比較研究-序説-」を書いている。

1986-87年度は黒崎千晴会長の下に常任委員長を務めることになった。この間の常任委員会は私の勤務先の國學院大學で行なっている。1988-89年度は黒崎会長、常任委員長は中島義一氏であるが、私は88年度に1年間の内地研修があったこともあって常任委員は免除されている。しかし、会誌として充実してきた『歴史地理学』と『歴史地理学紀要』との関係が問題になり、88年9月には紀要・会誌検討委員会が設置されることになり、その委員を委嘱され私が主査となった。問題点

は、①両者の刊行費が学会費を圧迫すること、②紀要はA5版縦書き、会誌はB5版横書きと体裁を異にするため図書館などでは整理に不便を感ずること、③編集にも二様の体制が必要とされること、④紀要は単行本として販売されるので、場合によって多量の在庫が残ることなどである。会員全体に対するアンケート調査なども実施した結果、1990年の第33回総会において、紀要を廃止して会誌に統合し、季刊であった会誌『歴史地理学』に紀要に代わる大会共同課題特集号を加えて年に5冊を発行することが決定された。

87年には土木学会の武部健一氏が朝日新聞で、日中共同で中国の古代道路の研究を進めようとの目的で、関心のある人の参加を呼びかけられたので、私も参加して日中古代道路研究会が結成され、88年には陝西省漢中市での褒斜道研究会への参加、陝西省榆林市の直道調査と2回の中国旅行を行なった。そこで、89年1月の第142回例会で「中国陝西省の旅－歴史地理的関心から－」と題して、「蜀の栈道」と「直道」についての中国の研究成果を報告した。

1990－92年度からは任期が3年ということになり、会長は山田安彦、常任委員長は立石友男さんとなった。私も常任委員として編集担当であった。私は92年に國學院を定年退職することになり、これが委員としては最後ということになったが、その後も評議員にはなっていた。この間、1990年大会（シンポジウム：変革期の歴史地理）で「交通・運輸の変遷とその変革期の諸問題」を担当したので、紀要に代わる最初の『歴史地理学』特集号（182号、1981年1月）に掲載されている。その他に第153回例会（1991年11月）で「坂東の古代交通路再考－近年の発掘成果に基づいて－」を発表している。

5. 定年退職後

定年退職した1992年に古代交通研究会が発足し会長に就任したので、以来その方で結構

忙しく歴史地理学会は大会には参加しても例会などは失礼することが多くなり、もちろん発表することも殆ど無くなった。しかし、たまたま2000年度の大会（シンポジウム：災害・防災への歴史地理学的アプローチ）が郷里に近い島原市で開催されることになったので、郷里の長崎県諫早市で1957年に起った大水害についても採り上げる必要があると考えたので、会員ではないが郷里の友人の山口祐造君を誘って共同発表することにした。

山口君は小学校・中学校を通じての同級生で石橋の研究家として知られていた。水害当時は諫早市役所の土木課技師をしていたので水害復旧工事に従事したが、特に重要文化財眼鏡橋（石橋）の移築保存工事を担当することになったので、それがきっかけになってアーチ式石橋の研究を始めることになったのである。発表題目は「洪水と橋の強度－1957年諫早水害の例を主にして－」として、私にとっては専門外のことでもあり山口君に登壇してもらうことにしていた。また私は老人性の難聴が進んで、補聴器を使っても話が聞きとり難く、発表はともかくとして討論には参加できないと思ったからである。

ところが山口君が病氣入院したので、結局私一人でやらなければならないことになったが、資料は殆ど山口君に拠ったものである。難聴のことでは実際に討論の際に困ったのだが、司会者の小林茂・磯望両氏の助けを借りてなんとか済ませることができた。本論は『歴史地理学』202号（2001年）に掲載されている。

その翌年、2001年6月30日に道都大学紋別キャンパスで開催された総会で、山嵯謹哉・黒崎千晴・中島義一・山田安彦の諸氏と共に名誉会員に推戴されることになり、たまたま出席していた私だけがその場で立石友男会長から名誉会員推戴状を頂いた。名誉会員といえば歴史地理学の大先輩のことと思って、自分になるとは思ってもいなかった。果たして

自分がそれに値するか心許ないが、大変有難いことと感謝している。

オホーツク海岸は1961年以來のことで、当時通った鉄道が廃線になったりして、かなり様変わりしていたが、大会後は網走に出て一泊してすっかり開けた知床半島を廻り、以前は歩いて横断した道をバスで羅臼に出て標津に泊り、かねがね一度は行ってみたいと思っていた野付崎を訪ねた。野付崎まで迎えに来てくれた國學院での教え子である北海道教育大学釧路校の中村太一君の車で釧路に出て、さらに一泊して帰った。

以來、2003年の大会は予定していた古代交通研究会の大会と重なったので参加できなかったが、毎年大会には参加するようしており、また2005年3月26日に行なわれた203回例会「船橋の歴史地理」(巡検)にも参加した。この時は途中で真直ぐ歩けなくなり、暫く休ませて頂いて回復したが、皆さん

に御心配をお掛けした。自分では元気な心算でいても歳をとると身体にいろんな不都合が出てくるものである。御年配の皆さんが会合においてにならないのも、そのようなことを心掛けておられるからではなからうか。私もそろそろ控えた方が好いのかも知れない。

私は1922年生まれであるから現在85歳である。恩師では織田武雄先生が先日99歳でお亡くなりになったが、先輩の多くも亡くなられ、同年輩の友人も少なくなってきたが、私より年下で亡くなった人もかなりの数になる。長生きをすればするほど寂しい思いをしなければならぬのだろう。

いささか湿っぽくなったが、私自身はもう暫くは元気でいて、歴史地理学会も大会には参加させていただく心算でいる。

(名誉会員)